
STORY

壬生一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STORY

【Nコード】

N0956I

【作者名】

壬生一葉

【あらすじ】

幼い恋心と自分自身の成長の記録。。。。

プロローグ

貴方に出会わなければ良かった。

1

季節がいくつ過ぎても、変わらないものはあるんだなと教室の窓から中庭を見下ろした。

「潮田、彼女来てるよ。」

前の席の佐藤が潮田睦月の机をノックした。それでも睦月は、頬杖をついたまま答えなかった。

それに釣られるかの様に佐藤も中庭に目を向けた。

「お前、何見てんの？」

「・・・んあ？別に・・・。」

睦月は、立ち上がると”彼女”の元に歩き出した。少し、ふくれっ面をした穂乃香が何時もの様に二人分の弁当を抱えている。

2

さっきまで見下ろしていた中庭で、やはり何時もの様に、ベンチに座り弁当を食べ始めた。

「睦月は体育祭、何に出るの？」

「・・・何だっけ。忘れた。」

「まあたー寝てたのお??？」

穂乃香の作った唐揚げを口に頬張り、辺りを見回す潮田。目の端に捉えた二人も同じ様に弁当を広げ、談笑している。

”変わらないもの”

「むつー??聞ってるの??？」

穂乃香に肩を揺さぶられ、画が乱れた。咽頭から込み上げる激しい怒りをグツと飲み込んだ。

「・・・ねえ・・・触りたいんだけど。」

「え?」

穂乃香は、睦月のこのトーンの話し方に何の事だか直ぐに察知した。

「中庭だよ? やだよ無理!」

睦月は冷たい視線を穂乃香に浴びせ、こう言った。

「・・・じゃあ良いよ。飯、もう要らねー。」

箸を弁当箱の中に放り投げ、腰を上げた。

「ま、待って待って!」

穂乃香にとって、睦月は絶対だった。

ベンチに座る穂乃香を見下ろす睦月の目には感情の微塵も感じられなかった。

それが又、穂乃香が服従せざるをえない武器の一つだった。

コの字の形状をした校舎の中庭は、職員室からは見えない。

ただ、殆どの教室からは丸見えの状態だった。

「制服、汚すなよ?」

睦月の膝の上に向かい合う様に腰を下ろす穂乃香は、唇を強く噛み理性を失うまいと目を固く閉じた。

穂乃香は、睦月の長い指が奥へ突かれる度に、声を漏らした。

睦月は穂乃香の耳元で囁いた。

「お前、本当にスケベな女だな。」

睦月は、弁当を広げてたさっきの二人の方を見た。
そこには、何も無かった。

STORY (2)

6時限目終了のチャイムが鳴って、それぞれが席を立ち、それぞれに散らばった。

「潮田ー、ちよつと未だ帰らないで。あと、宮崎と春日、門真、杉ねー！」

佐々木が片手に用紙を持ち、数人を呼び止めた。

「体育祭の学年対抗リレーの順番を決めないといけないんで。」
「・・・リレー？」

潮田が聞き返す。

「・・・おい、潮田クン。この前、決めたでしょ。」
隣に座った門真が肩を小突いた。

「あ、俺がお前をリレーに推したんだよ。」
杉が言った。潮田は、眉間に皺を寄せた。

「まあ決まったからには頑張っで。で、これが2年と3年のメンバー表。」

佐々木がメンバー表を皆が見れる様に机の上に置いた。皆がそれをこぞって覗き込む、潮田以外は。

「うげつまぢかよっっ！何だよ、この最速カップルはよっ！」
「カップルって・・・早坂先輩のこと??」

女子の一人、宮崎が聞いた。

「3年の元陸上部キャプテン、早坂さんとその彼女2年の清野さんだっで！おい潮田！清野さん走るぞ!!」

潮田は、興奮気味に話す杉を見た。それから初めてメンバー表に視線を落とした。

「清野さんも早いのか？」

「はえーよ！高校では、陸上に進まなかったみたいだけど、中学の時は短距離の記録ほとんど塗り替えてた人なんだっで！」
このメンバーを仕切る佐々木が杉を抑えた。

「2年も3年も勝つ気で来てるって事な訳ね。うちらは現役陸上部が俺と宮崎と春日の3人。門真はサッカー部・・・で、杉と潮田はどんななの？」

メンバー表に釘付けの潮田と違い、杉は生き生きとその質問に答える。

「俺と潮田も元陸上部です！」

「・・・ちよつと不安要素に感じるのは俺だけか？」

佐々木の小さな独り言に、同調する者が何人か居た。

「俺、アンカーの前が良い。」

それまで殆ど無言だった潮田が、はつきりとした口調で言った。それを合図に、リレーの順番が決められていった。

潮田がアンカーの前を走ると言った。

決して、適当な発言ではない。

2

「じゃあこれが最初で最後のバトンタッチの練習だから。」

佐々木が青のバトンを振った。

「あ、早坂先輩走るよ！」

潮田はそれには興味が無く、足元の小さな石を蹴った。

「引退して5カ月だろお？」

「毎朝ランニングは欠かさないらしいよ？」

1年5人暫し沈黙。

「3年は想像通り、早坂先輩がアンカー。トップに矢代先輩持ってきてるから、スタートから飛ばして逃げきる作戦かな。」

「2年は、アンカーが現陸上部キャプの千堂先輩。その前が清野さんで、中距離の宗田先輩か・・・。」

後半に追い込む作戦ってどこ？で、うちら1年の作戦は？」

宮崎の問いに佐々木は、真顔でこう答えた。

「杉と潮田の未知なる可能性にかけるしかないだろ……。」「1年トップに杉、アンカーは佐々木。杉の走りに命運を掛ける他なさそうだった。」

「ごめーん、遅くなったー。」

「七生！こっちこっち、早坂さん走っちゃったよ？？」

「見なくても速いの存じます。」

潮田は、清野七生の立ち姿を食い入るように見つめた。

STORY (3)

Tシャツにジャージ。後ろに束ねた長い髪。伸びた背筋。相変わらずのプロポーションが潮田の鼓動を早めた。

「潮田、始めるぞ。」

杉がバトンを手にスタートラインにスタンバイする。潮田も第5走者の位置についた。

佐々木がスタートの合図を送り、杉が走り出す。

9月とはいえ、西日が強く眼を細める。

潮田は、両足首を柔軟させ、自分の番を待った。イメージする。走る自分を。

清野七生のフォームを。

前の宮崎が走るのを確認し、レーンに足を踏み出した。

トラックの中に、2年の集団が見えて”見てる”と、潮田は思った。

「潮田！」

宮崎の声がして、潮田は前を向きスタートした。バトンの感触があって、更に強く地面を蹴った。

「おおー！」

杉が声を上げる。

潮田の目の前に直ぐに佐々木の後姿が見えた。

「はい！」

潮田の手から佐々木へとバトンが渡された。

先に走り終えた3年達も意外な伏兵に驚きを隠せない様子だ。

佐々木がゴールすると、真っ先に潮田の傍に駆け寄った。

「・・・潮田、本番もこの調子で頼む！俺は優勝できそうな気がしてきた！」

走ることが好きな陸上部員が本当に嬉しそうにそう言うので、潮田

も思わず釣られて笑った。

潮田は肩で速い呼吸を繰り返していた。運動らしい運動は、体育以外ではしていない。

「潮田！」

その呼吸が一瞬止まる。

ゆっくりと、確かめるように振り向くと七生が居た。

「綺麗なフォームは顕在だね。・・・体力は落ちてるみたいだけど。」

七生が笑った。

「・・・そっちはどうなんだよ。」

「見ててよ。」

細い指が潮田を突き刺す。

潮田は、その七生の背中を見送った。西日が長い髪を照らして、そこに光を見た。

潮田は、もう長い間ずっと七生の背中を追って生きてきた。

2年の練習が始まって、七生はいつもの様にアンカーの前の走者として走り切った。

走ることに真摯な眼差し、見事なフォーム、見る者すべてが感嘆の声を上げる。

見ルナ。見ルナ。見ルナ。

その場に居てもたっても居られなくなった潮田は、校舎へと走った。強く握りしめた掌に爪の跡がくつきりと残っていた。

トラックに残っていた誰かが言った。

「・・・清野さんと、潮田のフォーム、似てない？」

STORY (4)

3

中学に入学した春。潮田睦月は、ユーレイ部員で良いと聞き”陸上部”に入部届けを出した。

そこに清野七生が居た。

「潮田って・・・もしかして1月生まれ？」

「・・・そうですけど、何か？」

「あたしも七に生まれるでナオ。7月生まれ。」

自分を指差して白い歯を見せて、七生は笑った。

「おねえは3月だから弥生なんだよね。12月生まれとかじゃなくて良かったと思わない??」

「・・・計画妊娠でしようよ。」

「え?・・・計画・・・そうか・・・考えた事なかったな。はー成程ねー。」

潮田には、七生が妙に感心してる姿が可愛く思えた。

「俺は女みたいな響きだから、この名前好きじゃない。」

「睦月・・・。そっかなあ、まあ”シワス”じゃなくて良かったじゃない。」

未だ身長も然程変わらなかった七生が潮田の頭をポンポンと優しく撫でた。

「子供じゃねーぞ！」

七生の手を振り払って悪態をついた。

幼い12歳の少年が顔を赤らめてる、そんな姿は、少しお姉さんな七生の母性本能をくすぐった。

それから潮田は、ユーレイなんかではなく、部活に参加するように

なった。

七生が走る姿を、綺麗だと思った。

「七生、フォーム良いね。」

「・・・七生先輩でしょ？潮田？」

七生が潮田の背中を軽く押した。

「イメージ・・・かな。速い人のフォーム見て、頭でイメージするの。それで走ってみる。」

潮田がスタートラインに立つ。

目を瞑った。

イメージする。

七生のフォームをイメージする。

そして走り出す。

指をピンと伸ばし、大きくストライドを取り、ゴールだけを見て走る。

ゴールラインで、少し胸を出し、ラインを割る。その後軽く流す。

「はえー！！」

「潮田ー！！」

タイムを聞くと、今までより相当良い記録を出していた。

「凄いじゃーん！誰、イメージしたの？？潮田ー。」

「・・・マジック・ジョンソン・・・？」

潮田は部員達に囲まれてる自分が照れくさく、その場を去った。皆が潮田の背中に向かって叫んだ。

「それバスケットプレーヤーだから！！」

速く走る為に七生をイメージし始めたからなのか、潮田の中で七生の存在がどんどん大きくなっていった。

部活以外でも七生に会いたくなって、勉強が解らないと口実を作り、試験前には図書室で一緒の時間を過ごした。

全く頭に入らない数式に、シャーペンを投げ出した。目の前の七生の教科書にコロンと当たった。

七生が髪を耳にかけながら顔をあげる。

白いシャツの第1ボタンは外れていて、第2ボタンが外れかけていた。

七生は潮田の視線に気づいて自分の胸元に目を落とした。慌てて、前を抑えた。

「見てねーよ。」

幼い二人は、色んな意味で異性を意識した。

夏休みが訪れて、真黒になりながら、殆ど毎日走った。

「皆ー集合！」

3年の部長が集合をかける。

「夏休み明けて9月の記録会が終わったら、3年は引退します。で、次の部長なんです、3年で話し合った結果、清野にやってもらう事にしました。」

歓声が上がる。

七生は目を丸くして、手を顔の前で大きく振った。

「無理ですって！」

七生の周りにいた2年が「賛成」と挙手すると拍手が起きて、人の良い七生は大役を引き受けることになった。

STORY (5)

「七生ー今日、図書室行こうよ。」

潮田は何時ものように2年の教室まで顔を出して、七生を誘った。

「あ、ごめん。今日放課後、部長会があって行けない。ごめんね。」

”又か”と潮田は思った。体育祭に向けて部対抗の競技があるらしく、ここ最近七生は多忙だった。

申し訳なさそうな顔をした七生を一瞥して、そこを後にした。

廊下にあるロッカーの扉が開いていた。潮田は力任せに扉を押し閉めた。

廊下に居た数人の生徒が潮田に慄くように避けた。

もう何日もまともに七生の顔を見ていない潮田は苛立ちを募らせていた。

「潮田、今日部活行くよな？」

5時限目が終わると陸上部ユーレイ部員の杉が潮田の横に立った。七生の顔がちらついた。

「何で？」

「やー俺もたまには部活に出ようかとー……。」

潮田はジャージの入ったバッグを肩にかけ、立ち上がった。置いて行かれないように杉が潮田を追う。

「なあなあ潮田と清野さんって付き合ってるの？」

思わぬ質問に潮田は立ち止まった。

「誰から聞いて……。」

「聞いてって……。皆噂してるぜー、よく清野さんと二人で図書室行ったり、部活中もしょっちゅう二人で居るってー。」

全ての血液が急速に体のてっぺんに向かって流動してくるのを潮田

は感じた。

潮田は自分が七生に魅かれてる事を否定しない。ただ、周囲にそんな目で見られていた事に顔から火が出る思いだった。

「・・・俺、部活出ない。」

潮田は、階段を走り下り、下駄箱から乱暴に外履きを取り出す。

この時、彼は未だ12歳だった。

それからというものの、潮田は部活を休むようになった。

七生を見るのが怖かった。

・・・七生がもし、自分を何とも思っていないのだとしたら・・・自分が七生に注いできた視線がそこをすり抜けていったって事。

七生を独り占めしたいと思ってる。

でも潮田の中でそれを拒んでる記憶がある。

潮田は少し肌寒い秋風を受けながら、屋上に仰向けに寝転んでいた。空に右の掌を向けた。

ギュツ　と掌を握った。

七生の笑顔がその先に見えた。

抱き締めたら死んでしまうだろうか。

潮田が4歳の時、共働きだった両親が潮田に寂しい思いをさせないようにと黄色い小さな小鳥を買い与えた。

潮田は小さな手にちょこんと座り、愛くるしい眼差しを向ける小鳥が可愛くて可愛くて仕方なかった。

無機質な大きな家に、小さい光を見出した潮田は毎日毎日小鳥と過ごした。

籠の中に入れられてる小鳥が可哀そうに思えて、籠から出しては手

に乘せたり頭に乗せたりしていた。

しかし、4歳に飼っている小鳥が遠くへ飛んで行くと言う知識は持ち合わせていなかった。

運悪く、リビングの窓が開いていた。

小鳥は大きな世界に飛んでいこうとした。

「ピヨ!!」

潮田は素早い動きで小鳥を両手で捕まえた。

温かい感触があつて、潮田は安堵した。小鳥を捕まえた!この手の中に居る!!

ぎゅうつと抱き締めた。

何処にも行かないで!僕の傍に居て!!僕の友達だろ!!!

ぎゅうつと・・・。

暫くして潮田は、小鳥を籠に戻そうと思って、手を広げた。

潮田の小さな両手の中に、ピクリとも動かなくなった小さな命が横たえていた。

大いなる愛情が、小さな光を消してしまった。

STORY (6)

「・・・わっかんねー!!」

一人教室で、補習をさせられていた潮田は、大きな独り言を言った。中間テストで思わぬ点数を取った生徒は、1Bでは、潮田ただ一人だったようだ。

窓の外には木枯らしが吹いている。未だ16時だというのに、曇り空のせいで普段よりも早く闇が近づいてきていた。

「雨、降りそうだね。」

教室の入り口へと視線を投げると、そこには七生が立っていた。

「杉くんに聞いたら補習だって言ってたから。」

七生は、窓際の潮田の席へと歩み寄る。そして潮田の席の前に腰を下ろした。

「・・・何で最近、部活来ないの?」

潮田は自分の指先を見つめた。シャーペンを持つ手に力が入る。

「何か嫌な事でも?」

「・・・面白くねーから。」

「部活が?」

「全部。」

七生から注がれる視線が痛くて、潮田はこの場から立ち去りたい思いにかられた。

潮田は目を瞑った。肩が上下に揺れ呼吸が荒くなった。

息苦シイ

「ここ、Xaだよ?」

七生の指が、潮田の手に触れた。

「・・・潮田?」

潮田の尋常ではない様子に気づくと、潮田の肩に手をかけて顔を覗

き込んだ。

ヤメロ

潮田が握りしめていたシャーペンが鈍い音と共に壊れた。

壊レル

「どうしたの?! 潮田!!!」

肩に触れる七生の体温が、潮田の中に流れ込み、もうそれを抑える事は出来なかった。

潮田は右手で、肩に触れる七生の左手首を掴んで立ち上がった。

引っ張られるように七生も立ち上がり、次の瞬間には横にあった誰かの机の上に仰向けに倒された。

七生の両手は潮田に支配された。

潮田の唇の感触を首筋に感じた七生は叫んだ。

「潮田!!!」

七生は必死に逆らおうとした。

しかし潮田の力を振りほどく事は不可能で、掴まれた手首はギリギリと締まり、押し掛かる体重は脅威だった。

潮田は恋い焦がれてきた七生の白い肌を目の前にして、一刻も早く自分の物にしてしまいたかった。

七生の両手を、頭上まで持っていき、何とか自分の片手に納め、七生の制服のボタンを外そうとした。

その時、七生の抵抗が無いことに気づき、七生の顔を見た。

目を瞑り、涙が溢れ、唇を噛んで、堪えている顔だった。

我に返ると、潮田は自分のしたことの有り様をみた。

乱れた机の配列。

七生のスカートは捲れ、日焼けしていない太ももが露わになっていた。

七生のすすり泣く声が聞こえた。

STORY (7)

4

あれを無かった事には出来ないまま、潮田は中学2年、七生は3年になり、廊下ですれ違うことさえ皆無だった。

「潮田、1年の女子が呼んでるー。」

教室の入り口で、誰かに呼ばれた。

2年でも同じクラスになった杉が冷やかすように言う。

「先輩！2年になってから何人目ですかっ！」

「うるせーよ。」

非常階段の踊り場まで行くと、開口一番”好きなんです”と言われる。

初めて口を聞く相手に、一体俺の何を見てるんだろうと潮田はここ最近思っていた。

確かに・・・杉の言う通り、今年になって二人の1年に告白されて、断った。

「・・・俺の何知ってんの？」

「え・・・あの・・・優しそうなところ・・・とか。」

「俺あんたに優しくした覚えはないよ？」

こういうと大抵の女は泣きそうな顔になる。

「・・・って事で。じゃーね。」

潮田が階段を下りていく。

そこへ階段を上ってくる男と七生の姿を見た。

七生がふと上を見上げる。一瞬二人の視線はぶつかった。先に逸らしたのは七生だった。

潮田は、その男の顔に見覚えがあった。陸上部の副部長をやってる石神とか云う名前だった。

こんな場所に来てする事は一つ。さっきの俺と逆のパターンか・・・
と思った。

擦れ違いざま、潮田は七生の指にわざと触れた。

七生の手が過剰に反応して手を引っ込めた。二人の視線が又交差する。

今度は先に潮田が視線を外して、そのまま教室へと戻った。

七生があんな男を選ぶ訳がない。

七生にとって、俺以外の男が特別になる訳がない。

夏休みが明けて、潮田のクラスに時期外れの転入生がやってきた。

「安藤穂乃香です。先生、あたし後ろの席のあそこが良いです！」
たまたま潮田の隣が空いていて、穂乃香はそこを指名した。

「よろしくね！名前は？」

「・・・潮田。」

「潮田なに？」

積極的な穂乃香に鬱陶しさを感じた。

「・・・睦月。」

「1月生まれ？」

屈託のない無邪気な笑顔。

七生以外の女に、その話をされたのは初めてだった潮田は、心が騒いだ。

それからというものの、ことあるごとに穂乃香は潮田を頼り、二人が一緒に居ない日を見ないくらいだった。

「睦月、教科書忘れた。見せて。」

「又かよ・・・。」

穂乃香は自ら机をくっつけて、潮田の教科書を真中に置いた。

潮田は右手を頬杖をし、穂乃香に背を向けた。

窓から、ジャージ姿の七生を見つけた。

体育館に向かう渡り廊下をいつものメンバーで歩いていた。

七生が友達に向かって、笑う。

体育の担任が七生達を急かせて、七生は慌てて体育館へと姿を消した。

「睦月。」

七生があんな風に笑う顔を見たのは、何カ月振りかな・・・と潮田は思った。

「睦月。」

別の所から名前を呼ばれ、現実へと引き戻された。

黒板の方を見ると、担任が自分呼んだ訳ではなかったようだ。それから穂乃香の方を見た。目が合う。

「・・・何？」

「今日、一緒に帰ろうよ。」

潮田は突然の誘いに戸惑いつつ、了承した。

「睦月の家、近いの？」

「結構遠い。」

「ふーん・・・。睦月、あたしは安藤穂乃香。8月生まれのしし座B型。家は、直ぐそのマンション。パパは金融マンで、ママは専業主婦。一人っ子。」

中学の門を通り過ぎようとした時、穂乃香は突然自己紹介を始めた。潮田は面食らった。

「好きな食べ物は、お寿司。嫌いな食べ物は椎茸。」

「・・・ちょっと待って、何これ。」

穂乃香は立ち止まって、一度胸で大きく呼吸してはっきりとした口調で言った。

「あたしは睦月が好き。だから睦月の事もっと知りたいし、あたしの事も知って欲しい。」

穂乃香の告白は、潮田が今迄受けたことのない直球で、取りこぼす

ことは出来ないものだった。
「あたしの事も見たいの。」

STORY (8)

「清野、お前公立一本なのか？」

職員室で、担任に声を掛けられる七生。

「不味いですか？」

「いや、お前の頭なら何処でも行けるけど・・・陸上の強いところ行かないのかと思ってな。」

「まさかっあたしなんて凡人ですよー先生！」

七生はケラケラ笑って、職員室を後にした。3年の教室に向かう途中、中庭を掃除する潮田を見つけた。

足が一瞬怯む。

直ぐ傍で、ショートカットで背の低い可愛い女の子が笑ってる。

潮田の”彼女”なのだど風の噂で聞いた。

七生は目を伏せて、その場を立ち去った。

教室に戻っても、何だか気が晴れない七生は、陸上部の部室へと足を運んだ。

ジャージに着替えた。引退してから3ヵ月が経過していた。

「ちよっと部活、参加させて。」

「七生先輩！大歓迎ですよー！！」

何時ものように、柔軟をして無心を心掛けた。

スタートラインに立ち、目を閉じる、イメージする、走る自分を前にあるのは、白いゴールライン。

自分が見据えるのはそこだけ。

言い聞かせるようにスタートを切り、頭を真っ白にする。

地面を蹴り上げる靴の音が耳に届いた。

ゴールラインで、少し胸を出し、ラインを割る。その後軽く流す。

「気持ちいいー！ー！！」

七生は大きな声で叫んだ。

走った後の爽快感、達成感。この感覚が好きなのだ。

「ありがと!!!じゃっ!!!」

そう言うのと来た道を同じような走りっぷりで帰っていった。

「・・・睦月いクリスマス・イヴさー、パパとママが結婚記念日で一泊旅行行くのね。で、あたし一人なんだけど・・・来ない?」

「何か飯、作ってくれるの?」

穂乃香は顔をパァーと明るくして

「作るよ!何でも作れるよ!何食べたい?!」
と聞いた。

潮田の中の、七生が消えた訳ではない。ただ、穂乃香が七生を侵食しているだけだ。

「俺、ハンバーグはうるさいよ?」

「デミハン作るよ!超美味しいんだから!!!」

ただ腕を組んでくる穂乃香を、疎ましいと思った事はない。

穂乃香の存在が、潮田を健常で居させてくれるのは間違いない事実。

クリスマス・イヴの夜。

二人にとって異性と過ごす初めての夜だった。

一糸纏わぬ姿でベッドに横たわる穂乃香を目の前に、潮田は心躍る事も胸が騒ぐ事も無かった。

勃起さえしなかった。

”俺はこいつの事好きじゃないんだな”

そう実感するだけの夜だった。

「ごめん、俺帰る。」

「睦月!」

STORY (9)

3月になり、時々暖かく感じる日が増えた。3年は高校受験や合格発表で人数が疎らだ。

2年は3年が卒業する事にそわそわしている、そんな春先だった。

「ねえねえ睦月、”第2ボタン”の話、知ってる？」

給食を食べながら、何気なく穂乃香が切り出した話。

「何かーパパとママの時代って、卒業式とかに好きな人の学ランの第2ボタンを貰うんだって。で、相手が第2ボタン渡したら両想い、みたいな！」

クリスマスの方があって以来、キスをする事はあっても、それ以上先に進む事は無かった。

女の穂乃香から望む事も無かったし、潮田にとっても、すべき事では無いと思っていた。

「この学校で、そーゆーの無いの？」

「知らね。」

「ふーん、じゃあ夕実ちゃんに聞いてみよつと。あ、夕実ちゃん！」

「コラー安藤ー。席立つなー！」

教卓から担任の声が聞こえる。

「はいはい、ちよつと待ってー先生。」

穂乃香は注意そっちのけで、友達の席の傍でしゃがみ込んだ。

女ってのは、何であーゆー話で盛り上げれるんだ と潮田は溜め息をついた。

暫くして、穂乃香は目を爛々とさせて潮田の隣の席に戻ってきた。

「良いねえこの学校ー！女子が、このリボンタイを好きな人にあげるんだってー。もう、あたし絶対睦月に渡すから！って一年後の話だけどさー！！」

穂乃香は、自分の赤と紺のチェックのタイの端を両手で持ってみせ

た。

潮田はそれを見て、七生のタイが何色だったか思い返そうとしていた。

公立中学なのに、入学時に女子はタイの色が4色の中から選べると言う女子には素敵な特典付きた。

潮田はクラスの女子のタイを見た。

「・・・思い出せねー・・・。」

「ん？どした？」

ジャージ姿の七生は鮮明に思い出せる。走ってる姿も、笑ってる顔も。あと、恐怖に怯えた顔も。

自分の中の七生の記憶が、止まっている。

想いは薄らがないのに、真新しい七生が浮かんでこない。

絶望的だな。もう、終わりなのかもしれない。

卒業式が終われば、七生に会う事もない。

俺は、思い出の中の七生に縋ってる。

今年の3年は無事全員、高校に進学が決まったようで、晴れやかな卒業式となった。

潮田は在校生の席の一番、後ろだった。壇上で卒業証書を授与される七生を食い入るように見つめた。

背中まで伸びた黒い髪が、揺れる。

真っ赤なりボンタイだった。誰か、あれを受け取るんだろうか。潮

田はボンヤリと思った。

七生を見ても、以前ほど、苦しい思いをしなくなった。

まさしく穂乃香の存在のお陰だろう。

七生に穂乃香を重ねたつもりは、潮田にはない。

七生は人に頼まれたら嫌と言えないお人好しで、穂乃香は天真爛漫だけど一本筋の通ったとこのある女だ。

顔も特別似てるような箇所もない。

2列前の席にいた穂乃香の、後ろ姿を見た。

自分を想う穂乃香を本当に大事にしなければいけない時なんじゃないのかと、決意を固めようと潮田は思った。

”好きになれる筈だ”

卒業式が無事に終わり、3年と保護者が退席したので1年と2年は、パイプ椅子の片付けを始めた。

潮田もパイプ椅子を何脚か畳んで、倉庫へと運びながら、退場の場面を思い出した。

A組から出席番号順に卒業生が呼ばれて、椅子から立ち上がり、体育館の真ん中に敷かれた赤い通路をきびきびと退場するあの場面だ。

『清野七生』『はい』

すばやく立ち上がり、通路に向かって体を向け、右手に持ったハンカチで目を一度押さえた。通路に出て涙を堪えつつ前だけを見て歩いていった。

少し鼓動が速くなった。会えなくなると思う気持ちだが、感情を高ぶらせた。

「睦月、終わった？」

赤い通路のその先に思いを馳せていた潮田に穂乃香が声を掛けた。

「んあ？・・・あぁ。」

体育館から校舎へと続く渡り廊下を歩きながら、1階にある3年の教室が見える。

宿題もない春休みを目前に3年は浮き足立って、綺麗に着飾った親達もその中には納まりきれてない様だった。

1、2年は、階段へ上がりそれぞれに散っていった。

「おい潮田。さっき、3年のイシガミとか言う男が、部活来ないんなら部室のロッカー片付けろって言ってたぞ。」

「あぁ。」

「部室片付けるの？手伝おっか？」
「・・・良いよ。直ぐ終わるし。」

潮田は2年のホームルームが終わると、一人で校庭の脇にあるプレハブの陸上部の部室へと足を運んだ。

ドアを開けると、部室特有の汗臭さを鼻に感じた。

スチールのロッカーに、“シオタ”と書かれている扉を開けた。

何時入れたのか記憶にもない、潮田の布バッグが入っていた。バッグを引っ張り出すと何かが足元に落ちた。

リボンタイだった。

潮田はそれを拾い上げ、凄い勢いで部室を出た。

校庭を足が纏れるほど速く走り抜け、正面口から横の桜がある中庭を突っ切り3年の教室を覗き込んだ。

七生の居た3年D組には誰も居ない。

隣の教室を見ると女が一人居た。

「七生は?!」

外から突然声を掛けられた女生徒は一瞬たじろいで答えた。

「も、もう帰ったと・・・。」

潮田は最後まで返事も聞かず、今度は正門へと走った。

フザケンナ

正門から、七生の家のある方に走った。

「・・・七生っっ!!」

誰一人歩いていない永遠にも思える一本道を潮田は走り続けた。

「七生!!」

足が動かなくなった。膝からアスファルトへと落ちた。

確証は無い。

ただ信じたい、願いたい。

この手の僅かながらの望みを。

潮田は、真っ赤なりボンタイを強く強く握り締め、崩れ落ちた。

STORY (10)

虚空の心を抱えたまま潮田が部室へと戻ると、穂乃香が潮田の布バッグを膝にかかえベンチに座っていた。

「睦月！どうしたの？！」

潮田は穂乃香のリボンタイを見つけると、自分のポケットの中で握り締められた真っ赤なりボンタイを蘇らせた。

フザケンナ

俺カラ逃ゲルノカ

沸々と行き場の無い怒りがこみ上げてきた。

何で、俺の想いを受け止めないんだ。

何で、俺の隣に居ないんだ。

何で、あの時、泣いたんだ。

何で、俺の目の前に関係のない女が居るんだ。

潮田はベンチの上に穂乃香を力任せに押し倒した。

「む・・・何?!」

痛みに顔を歪める穂乃香。

潮田はリボンタイをむしり取った。そしてシャツのボタンをはじく様に、両手でシャツを剥いだ。

「睦月?!」

さっきから一言も発せず、狂気に満ちた表情の潮田を拒もうとする穂乃香。

自分の腰を跨ぎ、襲いかかろうとする潮田に穂乃香は懸命に抵抗した。両手で潮田の肩を押し上げようと試みる。

簡単に撥ね退けられる。

潮田の左手一本で、穂乃香の細い手首二本がベンチの上へと纏め上げられた。

「止めて！睦月！！」

潮田に穂乃香の声は届かない。穂乃香の頬につたう涙も目に入らない。

華奢な体に不釣り合いな程の大きな乳房が現れ、潮田は重ねた。

七生のシャツから少しだけ見えた胸元を。

七生

右手で穂乃香の下着を下げ、穂乃香の陰部に中指をあてがうと湿り気があるのを確認した。

抵抗力を失った穂乃香の両手を自由にすると、ベンチの脇に両腕が力なく垂れ下った。

柔らかい太股を持ち上げた。

七生なら、ここに筋肉がついてる筈。

お互いが初めてなのに簡単に挿入され、潮田は腰を振った。

穂乃香は、セックスに集中しようとしていた。

”睦月があたしを欲しいって言ってる”

”清野さんを失って、あたしを頼ってる”

”睦月が想ってた清野さんは、もう此处には居ない”

ほどなく、潮田は果てた。その後、穂乃香を膝まつかせフェラチオをさせた。

時々、上目づかいで潮田の顔を見上げる穂乃香。

潮田は、知った。

『支配』を知った。

5

4月、潮田は3年になった。

職員室で、七生の行った高校を調べた。この近くの駅から、3つめの公立高校。

偏差値56だと聞いた。陸上を続ける気はないのだろう・・・と潮田は判断した。

必ず入ってやると心に決めた。

今度は躊躇しない。何としてでも、手に入れる。

14歳の少年は、手に入らなかったものに執着心を燃やした。

幼児期、愛しさのあまり殺めてしまった黄色い小鳥。

小鳥が鳥かごにいない事に気づいた潮田の両親は、庭先に掘り返された土の跡を発見し、それから潮田に対し腫れものに触るような態度を取った。

母親が自分を恐怖の目で見ていたのを今でも忘れない。

「・・・ママ。」

声を掛けると、一瞬慄く母親の姿は忘れられない。

母親は逃げたのだ。優しく頭を撫でてくれた母親は、潮田から逃げたのだ。

そして、七生も、そうだ。

潮田から逃げた。

ある日、潮田は七生の高校まで出向いた。

下駄箱から七生がB組なのを知った。ローファーはHARUTAの紺。

下校時間になり潮田は七生に見つからないよう、道路を挟んだ近くのコンビニへと入った。

紺のブレザーに、水色のシャツ、紺のベスト、グレーのタイト、紺のハイソ。

前髪は伸びて、左右に分けてる。友達数人と、駅へと向かった。

その後を追い、駅近くの予備校に入って行くのを確認した。帰宅部な事も予測出来た。

傍から見れば、ストーカー。

しかし潮田にとっては、七生の事を把握することは当たり前。

俺と七生は想い合ってる。

その信念が、潮田を突き動かしている。

STORY (11)

「睦月は、高校何処行くの？K高？」

給食の終わった後、穂乃香が聞いた。

「・・・F高。」

穂乃香は一瞬言葉を失った。自分の中にあった希望の灯が消えつつあるのを悟った。

「・・・清野さんが居るから？」

思い切って切り出した核心を突く質問に、潮田は動じることもなく答える。

「そうだけど。何？」

半年前、卒業式があつて、あの日から潮田は変わった。豹変したと言つても過言ではない。

”清野七生” 以外はもうだつていい。

そういう男になってしまった。

「別れる？」

穂乃香は首を振る。

何度こういうやり取りがあつた事だろう。

些細なことから大喧嘩に発展した時、潮田の機嫌が悪い時、強姦のようなセックスをした時。

穂乃香は、潮田が七生に固執する様に、自分も潮田を手離したくないと思つた。

この学校に転入してきて、穂乃香にとって潮田は顔が好みのタイプだった。

話してみたら、不器用だけど優しい人なんだと思つた。内に秘める

何かを感じた。そして、誰かを一途に想ってるんだと解った。それでも一緒に居たいと思った。

相手が清野七生だと知った時、正直不思議だった。特に美人ではない。でも、凄く優しそうで、人の良さそうな人。気難しそうな潮田と、何処にでも居そうな清野さん、釣り合うとも思えなかった。

あたしの方が睦月と上手くやっていける女だと穂乃香は思った。でも・・・潮田はやっぱり、清野さんを忘れてない。忘れるどころか離れた事で執着を燃やしてると言っても良い。穂乃香はあれからずっと考えてる事がある。

卒業式の日、睦月と清野さんに何かあったのか・・・。

潮田は定期的にF高に居る七生に会いに行った。勿論、七生はそれを知らない。

他の友達がメイクをしたりしていても、七生は素の可愛らしさを失っていない。

潮田にとってF高を受験する事は決して簡単な事ではない。

けれど七生が自分を待ってると思ったら、勉強も苦では無くなった。

受験が迫り、家庭教師をつけたり、予備校に通ったりでF高に足を運べなくなった新年は苦痛だったが、

潮田は七生が残した箸の真っ赤なりボンタイを見て、自分を慰めた。

そして、潮田は穂乃香と共にF高に合格した。

穂乃香は卒業式の日、自分の赤と紺のリボンタイを潮田に手渡そうとした。

「睦月に受取って欲しいの。」

潮田は穂乃香を憐れむように見た。

「これは受け取らない。俺は七生を迎えに行く。」

穂乃香は泣きそうになるのを懸命に堪えて言った。

「それでも！・・・あたしは睦月とは別れない。あたしは睦月が好きなんだもん！」

「・・・勝手にどうぞ。」

入学式。

1年のクラス発表の横に、2年のクラスも掲示されていた。

潮田は自分のクラスをチェックした後、2年の方を見た。

七生はD組だった。潮田が自分の教室へ入ろうと向きを変えようとぶつかった。

「ごめんなさい！・・・しお・・・た。」

予期せぬ再会の場面に潮田も声を失った。

七生。

「七生？」

潮田では無い男の声が、七生の名を呼ぶ。

「・・・あ、ごめんね・・・じゃあ。」

七生は背の高い男の傍に駆け寄り、緊張感のある適度な距離を持って校舎に消えていった。

その男の名は、早坂優弥。陸上部のエース。七生の彼氏。

潮田は息をする事さえ、忘れた。

STORY (12)

6

「七生？さっきの1年、知り合い？」

早坂の声を取りこぼすほどの動揺に見舞われる七生。

” 潮田が・・・？ ”

「七生？」

目の前に早坂の顔が飛び込んできて、七生は我に返った。

「あ・・・え？」

「さっきの1年、知り合い？って聞いたの。」

「ああうん。同中で陸上部だった子。」

「へえー、じゃあ陸上部入ってくるのかな。」

「うーん、どうかなあ。途中で部活来なくなっちゃった子だから・・・。」

「そうかー。」

七生は、早坂の顔がまともに見れなかった。潮田の顔が頭から離れない。

「・・・何か、騒がしいな。」

早坂が足を止めたので七生も立ち止まり、潮田が居た正面玄関を振り返った。

人だかりが見えた。

誰かが倒れたと、誰かが言っている。職員も数人集まり、潮田が保健室に運ばれて行くのを七生は茫然と見つめていた。

「・・・。」

自分がベッドらしき物に仰向けに寝かされているのに気づいた。ベッドが囲むようにカーテンが引かれている。

カーテンが開くと外の光が異様に眩しかった。

「気分どう？」

白衣を着た保健の先生らしき女が顔を覗かせた。

潮田は、さっきこの目で見た残酷な事実を思い出した。又心臓が締め付けられる様な痛みを感じた。呼吸も苦しくなる。

先生は、紙袋を潮田の口元に合わせて広げながら背中を摩った。

「潮田君、大きく息してー、潮田君！大きくだよー。」

先生の指示通りに紙袋の中に呼吸を試みると、少しずつ楽になった。症状が落ち着き、先生は言った。

「過呼吸だね。前からあるの？」

背中を丸め、両膝を抱え込むように横向きに寝転ぶ潮田。呼吸を整えながら、ベッドの端に腰掛ける先生の胸に目がいった。

「・・・先生、何て名前？」

「福原・・・。」

「フクハラ何？」

「藍。」

潮田は吹き出した。

「卓球かよ！」

「だから言いたくないのよ！あたしの方が先に生まれてんのに！」
福原は眉間に皺を寄せた。

「アイせんせえー・・・おっぱい触っていい？」

潮田の背中を摩るのを止め、福原は立ち上がった。

「そんな事言えるなら大丈夫ね。もう入学式も終わっちゃったから、立てるんなら帰っても良し！」

「あそこなら勃ってますけど。」

「・・・ガキに興味無し！」

そう一喝すると、自分の椅子に座り、何かメモし始めた。

「ちえー・・・。」

潮田は、仰向けになり天井の蛍光灯を見た。

「・・・死にてー・・・。」

福原のメモを取る手が一瞬止まった様な気もしたが、紙を捲る音がした。

「よ、有名人！」

入学式の翌日、学校に行くと同中しかも陸上部に籍を置いていた杉が潮田に声を掛けた。

「大丈夫なのか？」

「ああ。」

「睦月！」

後ろから穂乃香の声がした。

「昨日ずっと心配してたんだよっ?！」

潮田の携帯には、50通にも及ぶメールと20件近くの着信があった。

「・・・お前も馬鹿だな。」

そう穂乃香に言い放つと、潮田は足早に教室へと入っていった。

好きな人に、別の誰かが居る。

滑稽だ。

潮田は呼吸の乱れを感じて慌てて、深呼吸をした。

自分でも何で、学校に来たのか理解出来なかった。

他の男と居る七生を見て、自殺行為か。

昨日見たことの真意を確かめたいのか。

STORY (13)

潮田のクラスから中庭が良く見えた。

七生と早坂が仲良く弁当を食べてる姿が、嫌でも目についた。

どうやら潮田が受験に集中していた時期に、付き合いが始まったようだった。

どうしてやろうか。

潮田は机に突っ伏し、考えた。

恐らく、早坂が七生に告白し、七生がそれに了承したんだろう。

七生が好きなのは俺なんだから。

さっきの七生の、早坂に笑いかける笑顔が蘇る。偽りには見えない。もう、潮田の指の隙間から光はこぼれ落ちてしまったのか。

又、心臓の痛みを微弱に感じ、フラフラと保健室へと向かう潮田。

「・・・ここ貴方の部屋じゃないんですけど？潮田君。」

「空いてるんだから良いじゃん・・・又、心臓痛いんだもん。」

福原は溜め息をつきつつも、潮田を保健室のベッドに寝かせたままにした。

「先生、今日ピンクのブラジャー？」

「残念でしたー、違います。」

「俺ピンク好きなんだよね。今度してきたら見せてねえ。」

回転するイスが音を立て、福原が潮田の方を向いた。

「・・・F高にこんなキャラの子も居るんだね。」

潮田は枕に顔を埋めて、目を閉ざした。

潮田は夢を見た。

潮田は中庭で、七生とベンチに座ってる。楽しく話してたかと思うと、ふと七生が潮田から視線を外し、遠くの誰かに手を挙げた。そこには早坂が居た。そして七生が早坂の元へと走っていった。

「・・・七生!!」

潮田は、ベッドから跳ね起きた。カーテンが引かれている。物音はしなかった。

ベッドから降りて福原の姿を探す。保健室は電気もついておらず、誰も居なかった。

時計の針は、14時を指している。

潮田は静かに保健室を出ると、教室へ戻った。

隣接されている薬品室から、福原が出てきた。そしてベッドの乱れを直す。

中庭の七生と早坂を見ているのは、潮田だけではなかった。

ある日の放課後、陸上部の見学をしている七生に、穂乃香は声を掛けた。

「清野さん、ちょっと良いですか。」

七生は突然の訪問者に驚きを隠せなかった。

穂乃香と七生は、ひと気の少ない部室裏で対面していた。

穂乃香は憎悪の目を七生に向けていた。堪りかねて七生が口を開いた。

「・・・何?」

「あたしの事知ってますよね？」

七生は頷いた。

「睦月の彼女の安藤穂乃香。貴方は早坂さんの彼女ですよ？！」

七生は又、頷いた。

「じゃあ睦月の心を乱してるのは何ですか？？貴方、卒業式に何かしたでしょ？」

沈黙が流れた。

「・・・睦月が貴方の事を好きなのは知ってます。」

七生が顔を上げて、穂乃香を見た。

「・・・何で・・・潮田が好きなのは安藤さんでしょ？何でそんな事言うの？」

穂乃香は吐き捨てるように一度だけ笑った。

「本心からそんな事言ってるの？」

又、七生はダンマリした。

「・・・あたしパパにこう言われて育ってきた。」人を下げるんじゃないかって、自分が上がるんだ”って。だからあたしはそれは守ってる。

人前で誰かの悪口も言った事ないし、なるべく僻む様な事もしない。だけど、貴方にはそれは通用しない！だって、貴方はあたしと同じ位置に立ってないから！貴方は睦月から逃げた！目の前に居ない女を下げる事も、それより上がる事もあたしは出来ない！だから貴方はズルイ！」

返す言葉は無い。ただ七生はそこに立ち尽くすだけだった。

「・・・やっぱり納得できない。何で睦月が貴方に執着するのか・・・。」

穂乃香は怒りの感情を隠す事もなく、目に涙を浮かべながらその場を立ち去った。

七生は自分のしてきたことの重大さに初めて気づいた。どうしたら良いのかも解らず、”やっぱり”逃げたいと思った。

STORY (14)

「睦月、お弁当作って来たよ、一緒に食べよ？」

穂乃香は変わらぬ態度で潮田に接した。潮田は”哀れな女”に同情した。

「・・・中庭で食べようか。」

潮田と穂乃香が中庭のベンチに腰掛ける。少し離れたベンチに七生と早坂の二人も居た。

意識しない訳がない。

穂乃香は、潮田の為にランチボックスを開け、箸を渡す。

潮田の心はココには無い。もう一つのベンチへと向けられていた。

七生が潮田達に少し背を向けるような座り方に変えた。

「・・・清野さんは早坂さんを好きなんだよ？」

潮田は穂乃香を見た。穂乃香は潮田から罵声でも浴びせられるかと思っていたが、そうでは無かった。

「俺は七生が好きなんだ。・・・それと同じ事だろう。お前に七生の事でどうこう言われたくない。二度と言うな。」

潮田は、七生に話しかけるのを躊躇っていた。又あんな顔をされるのが嫌だったからだ。

好きで好きで仕方なくて、自分の物にしてしまいたい、そうは思っている。でも、怖いのだ。

早坂が居る事が脅威なのでは無い、本当に、失うのが怖いのだ。

夏休みが間近と云うある日、潮田の家に一通のエアメールが届いた。

送り主の名前を見ても直ぐには判らなかった。

文面から、陸上部のマネージャーをやっていた林紗江という女からだど判り、そこには驚きの事実が書かれていた。

ご無沙汰しています。

潮田君は覚えているか解らないけど、陸上部でマネージャーをしていた林です。

実は、卒業式の日には貴方のロッカーにリボンタイを置いたのは私です。

あの時は、記念になれば良いと思って、そうしました。

今、私は父の転勤でイギリスに居ます。暫くは日本に帰るようないことは無いみたい。

だから潮田君と付き合いたいとか、そんな事を思ってる訳じゃないんだ。

ただ、私が潮田君を好きだった事を知ってほしかっただけです。

どれくらい、そうしていたか分からない。

潮田は、自分の部屋に差し込む月の光に気がついた。

「・・・林？」

潮田はクローゼットの奥の方から、真っ赤なりボンタイを取り出した。

それを見た。

七生が自分のロッカーに入れた筈のタイは、他の女からだった？

「嘘だろ・・・？」

潮田の中に林紗江と言う女の記憶は無い。

「嘘だ！！！」

潮田は大声で叫び、咽び泣いた。
心臓は痛み、呼吸が苦しくなる。

もう消えたい。

七生の居ない世界に、
いきたい。

STORY (15)

7

何をするでもなく、潮田は家の中に閉じこもった毎日だった。

母親が心配するかの様に、毎朝決まった時間に部屋をノックし声を掛ける。返答がないので、部屋の前に朝ご飯をトレーに乗せて置いていく。

エアコンの動作音だけが部屋に響いていた。

着信もメールもあったが、何日か前にそれさえも受け付けなくなつたバッテリー切れの携帯がカーペットの上に転がっていた。

潮田は、ベッドの上で時々、向きを変えたり、壁に背を付けて膝を抱えたりしていた。

家のインターホンの音がした。静寂。インターホン。静寂。インターホン、インターホン、インターホン。

潮田は重い腰を上げた。

解錠し、ドアを押し開く。

「よっ。」

「先生……。」

保健医の福原が、コンビニの袋を片手に家の前に立っていた。

「男くさっつ。」

そう言い顔をしかめ、福原は潮田の部屋の窓を開け放った。

「でも暑っ。」

直ぐに閉める。

潮田は頬を緩めた。

「これお母さんが作った朝ご飯でしょ？スクランブルエッグ美味しそう！食べていい？潮田君はこっち食べなよ。」

福原は、ベッドの上に持参したコンビニの袋を置き、自分はトレー

を机の上に置き”いただきます”のポーズをした。

「・・・もう夏休みなの、知ってる？」

福原は、先ずトーストをかじった。

「どうでもいいよ。」

「辞めるつもりなの？」

「・・・分かんない・・・どうしたら良いのか分かんない。」

フォークでサラダを突く。

「2年の清野さんの事、好きなんだ？」

「ふ。何で知ってんの？せんせえ。」

「君を見てれば分かるよ。・・・安藤さんだっけ？あの子と居る時と、清野さんを見つめる君の顔は全然違うし。今、思えばだけど、中学の制服着て、この学校覗き見してたの、あれ潮田君だよな？」
潮田は、観念した様に溜息をついた。

「警察には言わないでよ、ストーカーだって。・・・見られてるもんだな。」

スクランブルエッグをフォークに上手に乗せ、口に運ぶ福原。”美味い”と小さく呟いてフォークをトレイに置いた。

そして、潮田を見た。

「過呼吸の原因も、清野さんが関係あるんだよね？この前、保健室でうなされてた。」

潮田は福原から目を逸らし、親指の爪を噛んだ。視線が泳ぐ。

落ち着きのなくなった潮田に気づき、福原は口を噤んだ。

暫く沈黙が流れて、福原は立ち上がった。

「・・・無理になかった事にしようなんて思わない事。気の済むまで、縋ってたら良いわ。」

「・・・。」

「過呼吸になったら、ペーパーバッグ法、必ずやるのよ。じゃ、帰るわ。」

確かに・・・この想いをなかった事には出来ない。

無理矢理、犯ろうとした事も、あの泣き顔も。

痛みから逃げようと穂乃香を抱いた事も、結局大事に出来ない事も。

他の男の物になったとしても、簡単に諦める事は出来ない。届かなくても叶わなくても、この想いはぶれない。

STORY (16)

潮田にとって高校生活初めての体育祭を半月後に控えていた。

校庭でのリレーの練習中に、七生が久しぶりに潮田に話しかけた。

しかも、七生からだ。

七生は普通だった。まるで中学の時の部活中なのかと錯覚するくらいに”普通”だった。

そして、七生譲りのフォームを『綺麗なフォーム』だと言った。

七生の走りも顕在だった。

「おはよ、睦月！昨日、リレーの練習で睦月、凄かったんだって？
！ああ見たかったなー。」

下駄箱から上履きを取り出しているところに穂乃香が現れた。

「・・・穂乃香。」

穂乃香は笑顔で応える。

潮田は頭を90度に深々と下げた。

「・・・何・・・。」

「ごめん・・・謝って済む事じゃないけど・・・ごめん。」

登校してきた生徒が何人も、異質な光景に見入っていた。

穂乃香は潮田の頭を上げさせようと、両手で潮田の肩を押し上げようとした。強固な意志がそれを阻む。

「ごめん。」

穂乃香は、返す言葉も見つからず、ただただ立ち尽くした。

あたしを力で抑制するのではなく、本心で訴えてきた。

睦月の心は、清野さんの、清野さんだけのもの・・・。

穂乃香は、不安定な足取りで今、来た道へと戻っていた。

保健室のドアがノックされ、福原が返答する。

「先生、生理痛の薬、又くさあい・・・痛い・・・。」

「又来たな。2年の清野。生理痛になるの判ってるのに何で自分で持っていないかなあ。」

「・・・えへへ。」

福原は、薬品室に行き七生が何時も飲んでいる薬を持ってきた。七生は慣れた様にコップをキャビネットから出し、蛇口をひねった。それを飲み干すと、ベッドに腰をかけ上半身を倒した。

福原は、器用に指先でボールペンを回した。暫くの間そうしてから、薬の使用を記帳した。

「昨日のリレーの練習、帰り道に見たんだけど、1年の潮田君も何か格好良い走りしてたね。」

七生はベッドの上で目を閉じている。

「ああそう潮田君と言えば、今朝、下駄箱で彼女に別れ話してたんだってね。教頭がプリプリ怒ってた。」

「え？」

七生は目を見開き、上体を起こした。

STORY (17)

それを聞いたからって、何をするでもなく、何が出来るのかも分からない。

七生は自分が何も出来ない、どうしようもない人間だと思った。
穂乃香が言った言葉が頭から離れない。

貴方はあたしと同じ位置に立ってない！貴方は睦月から逃げた！

返す言葉は無かった。正にその通りだから。

七生が教室へ戻ると、お昼休みになっていた。

「七生、早坂さん、さっき来て中庭で待ってるって言ってたよ。」

無言で頷いて、お弁当を持ち中庭へと向かう七生。

昨日まで潮田と穂乃香も中庭でお弁当を広げていた。あれは何かを言おうとしてるからだと思っていた。

でも、もうその二人は中庭には、居ない。

本当に二人の姿がないのを確認して、七生はホッとした。もし潮田がベンチに座っていたら、七生はきつと逃げ出しただろう。

「ごめんね、保健室行ってた。」

「食べようか。」

早坂は七生が来るのを待っていた。当り前の様に、七生が隣に座ってからお弁当のクロスを開いた。

七生にとってこの優しさが、決め手だった。

陸上部のエースで頭も良くて、優しい。そんな早坂に憧れる女の子は多数居た。七生も淡い憧れを抱いていた。

秋に文化祭委員で話すようになり、その人柄から醸し出されるあつたかいオーラは、七生を包み込んだ。

潮田とは正反対の人だと思った。

早坂は太陽の光のような温かさを持ち、潮田は炎のような熱さを放ってる。

潮田との事は”あんな恋もあった”と何時か思い出になる、そう思い、早坂の申し入れを受け入れた。

それで終わると思ってた。

春に、潮田と再会するまでは。

「聞ってる？」

早坂の声に我に返る七生。

七生は早坂の方を向き、無理に笑顔を作った。

「あ。ごめん、何？」

「リレーさ、2年対3年の一騎打ちになるかと思ったけど、1年も結構速い奴集まってるんだなって言った。」

「・・・ああうん、そう、だね。」

「潮田だっけ？勿体ないな、陸上部に入れば良いのに。・・・」

早坂は何かを言いかけて口を噤んだ。

七生は味も判らないお弁当を黙々と口に運ぶ。

体育祭当日は、穏やかな秋の天候に恵まれ、プログラムを順調に消化していった。

幾つかの競技に参加し活躍する潮田が、七生の目に嫌でも映った。別れた筈の穂乃香も潮田に一定の距離を置いて応援していた。

七生は2年の青色のハチマキを巻き直す。

穂乃香を羨ましいと思った。

穂乃香の強さが美しいと思った。

シュツとハチマキの結び目が締まる音。七生は顔を上げた。

『嘘』までついた。

もう後戻りは出来ない。あたしは今の自分を信じるしかない。

体育祭最後のプログラム”学年対抗リレー”では、異様な熱気に包まれていた。

今年のリレーは面白いらしいと噂が噂を呼び、注目度も高かった。これまでの競技の得点で2年・3年は接戦で、1年はそれを追いかける状況。このリレーで1年が1位を取れば逆転出来るか？と言う面白い展開だった。

潮田と七生は、アンカーの前走者で同じ場所で待機していた。

スターターが競技用ピストルの引き金を引いた。

潮田は足首をほぐし、第1走者の杉を目で追った。2年・3年に遅れを取ってるのは明白だった。

潮田が小さく笑ったのに七生は気づいた。

「・・・笑ってる？」

思わず七生は聞いた。

「・・・こんなに大勢の前で走るの初めてだから。何か面白い。」

潮田は直ぐに七生から視線を外した。走る事に集中しようと思った。バトンリレーが行われ、潮田達の前の走者がスタートしたので、二人はレーンに出た。内側から3年、2年、1年の順だ。

3年、2年は時間差でバトンタッチをし走り出した。少しの間があって、潮田がスタート。

自分のスピードに乗ると、応援席があっという間に流れる景色になった。

追いかけていた七生の後ろ姿を捉えたと思った次の瞬間には肩を並べ、追い越した。

”潮田！”

七生は近づき、遠ざかる足音に驚異を感じた。

潮田にはアンカーの佐々木が見え「佐々木！」と声を掛けた。トップを走っていた3年はアンカーの早坂にバトンタッチした。

無事にバトンを渡した潮田はトラックの中に入った。杉が抱きついてきた。

「半端ねえー！！」

潮田は、爽快感でいっぱいだった。自分が”七生”を追い越したことなど忘れていた。

自分に変化の時が訪れている事に気がついた。

潮田のワンテンポ後にアンカーにバトンを託した七生は、トラックの中で両膝に手をつき、口を大きく開け早い呼吸を繰り返した。

さっき見たのは、紛れもなく潮田の背中。

七生は姿勢を正してから力の入らない右の掌を見た。

潮田の背中が目に入った時、七生は手を伸ばそうとした。

リレーの勝負の話じゃない。

”離れないで”・・・”離さないで”　そう心の中で叫んだ。

七生は弱くて脆い自分に腹が立った。

STORY (18)

早坂が校舎の外周をランニングする潮田を見つけ、笑顔で声を掛けた。

「潮田、陸上部に入ってくれたんだってな！」

潮田はそこで足踏みをしながらか、首に掛けたタオルで汗を拭いた。

「……あんたの為に買った訳じゃねーよ。」

「……うん、そうだ。確かに。でも期待してるよ。」

爽やかさを残して早坂は去っていった。

潮田は、思ったより冷静な自分に驚いた。そして又、走り始めた。

七生が早坂と付き合っていると知った時の自分は尋常じゃなかった。

心臓を締め付けられ過呼吸にさえ陥った。

ところがどうだろう。

福原の”気の済むまで縋ってればいい”という言葉聞いてから、呪縛から解放された様な気がした。

それまで、七生を手に入れる事しか眼中になかった。それだけが全てだった。

潮田が生涯初めて好きになった女ときっと両想いだった筈の中学時代。

暴走した想いが七生を傷つけた。それでも潮田は七生と結ばれるんだと確信していた。

だからこそ、七生が別の男を選ぶなんてヒトカケラも思ってたのだった。

自分を裏切った女か、自分の女を取った男か、どちらかを傷つけてやろうと思っていた。自分と同じ痛みを知れば良いと思った。

福原の言葉が、”想い続ける”という選択肢がある事を示唆してくれた。

穂乃香にも心から罪悪感が生まれた。

そして、七生が普通に潮田に話しかけた。あれも、潮田を成長させた一因だった。

七生にとっても潮田に話しかけるのは勇気のいった事だと思った。

俺は七生が好きだ。

で、いつか、七生以外の誰かを好きになる。

今は、七生が教えてくれた走ることの面白さに興味が湧いてきた。七生が居なかったら、知る事も無かった喜びだろう。

7

又、春が来た。

早坂はこの街から離れた国立大学に合格したと噂で聞いた。

七生が早坂の卒業式の日、肩を震わせて泣いていたのを潮田は見かけた。

不思議と心は痛まなかった。

「先生……生理痛の薬い……。」

「出た、清野！」

福原は常連の一人の為に、薬品室から薬を持ち出した。七生はいつものようにキャビネットを開けた。

「早坂、遠い大学に行っちゃったんだって？遠恋？」

七生は蛇口に手を掛けたまま、

「別れたの。」

と言った。

「離れたら、やっていく自信がないって。……早坂さんが、そん

な事言うなんて思わなかったけど。」

「・・・本当。意外だな。努力するタイプかと思ってたけど・・・。」

「コップの中の水が溢れ出し、七生は慌てて蛇口を戻した。」

「きつと知ってたんだと思う。」

「・・・。」

「あたしの心が別のところにあるのを。」

STORY (19)

「潮田。今度の国体で結構なタイム出せば、推薦書くのも先生、楽なんだよな。」

職員室に日誌を提出しに赴いた潮田に、担任がそう言った。

机の上には、潮田が書いた進路調査票が置かれていた。

「やりますよ。」

茶化すのではなく、潮田は自信を持ってそう言った。

「・・・期待してるよ。」

潮田が職員室を出て行くと、職員たちが感嘆の声を上げていた。

「いやー私、1年の時に担任してましたけど・・・潮田は変わりましたなあ。」

「本当に。陸上があいつを変えたんでしょねえ。」

潮田は高校3年になっていた。

2ヵ月前、七生は卒業した。ここから少し離れた専門学校に進学すると言っていた。

潮田から七生に「卒業おめでとう」と声を掛けた。

七生は笑顔で「ありがとう」と言った。その後「陸上も頑張って」と潮田に握手を求めるように手を差し出した。

潮田は少し考えてから、右手を伸ばした。

その手は温かったと、お互いに感じた。

「・・・何してんの、潮田。」

福原が両手を腰に当て、ベッドで熟睡してる潮田を見下ろした。

溜息をついてから、自分の椅子に腰を下ろす。そしてベッドの潮田を見た。

一昨年、潮田がこの学校に来て、福原は何て危うい子なんだろうと思っていた。

話をするうちに、この子を支えてるのは、七生を想う気持ちだけなんだと解った。

幾つかの季節が過ぎて、七生も潮田をずっと想ってる事を知った。福原はそれを知るただ一人の人物だったと言っている。

それとなく、潮田に七生の気持ちを伝える事は出来た。けれど、そうはしなかった。

今の潮田に、七生が必要なのかどうか図りかねた。

勿論、お互いが思い合っていることが判れば、それも一つの幸せだろう。

でも・・・今の潮田には、走る事がある。

潮田の走り終えた後のあの顔は、何にも変えられない至福の時な筈。

「・・・せんせえ・・・何見てんのお？」

潮田が目を開けて、福原を見ていた。福原は一瞬、たじろいだ。

「・・・ああ・・・潮田、成長したなーと思って。」

「ふふ、なあーんだ、俺とシタくなっちゃったんじゃないのお？」

「・・・やっぱり成長してない。」

福原は、潮田に背を向けた。潮田はケラケラ笑った。

8

「推薦とは言え・・・奇跡だな、潮田。」

有名な体育大学の入学案内を持って、担任に合格を報告したら、第一声がこれだった。

「奇跡ってなんだ・・・国体で新記録も出したんだから、実力でしようよ。」

同じように職員室に来ていた穂乃香が、潮田の肩を叩いた。

「睦月ー！受かったんだー！！おめでとー！！」

「サンキュ。穂乃香は？」

「あたし？あたしは、製菓の専門学校。」

「製菓？お菓子って事？」

二人は職員室を出て、3年のフロアへと一緒に歩いた。

「そうよー、パティシエ。」

「料理、得意だったもんな。」

「睦月、進む道は違うけどさ、お互い頑張ろうね。」

穂乃香の満面な笑みは、眩しかった。

「あ、純ちゃん！」

穂乃香は彼氏の姿を見つけ、右手を上げブンブンと振り回した。

「じゃね、睦月。」

穂乃香と別れてから暫くは口を聞く事も出来なかったが、穂乃香が
”友達だよね”と普通に接してくれた。

2年、3年とクラスも別々だったから話す機会もそう多くはなかったが、好きな人が出来たんだと潮田に真っ先に報告にきた穂乃香。

潮田は、彼女の強さに憧れさえ覚えた。

STORY (20)

まるでドラマか小説の世界の再会。そういうのもあるものだ。

潮田が大学2年の夏、バイトで入ってるコンビニに偶然にも七生が訪れた。

「・・・七生。」

潮田はマガジンラックの本を並べ直してるところだった。

「久しぶり。」

そう言い、七生は女性雑誌を手に取り、パラパラと捲り始めた。

「どうしたの？ここら辺で何か用事？」

ここは潮田の通う大学の近くで、七生が来たのも初めての事だったから潮田は聞いた。

「うん、これから合コン・・・。」

潮田は笑った。

「潮田君、もう上がって良いよー。」

コンビニの店長が潮田に声を掛けた。

「あ、はい。じゃあ俺、バイト終わりなんだけど、七生どこで待ち合わせしてるの？」

「・・・ここ。友達がこのコンビニで待っててって。」

「ああそうなんだ。じゃあ俺、ここで。」

「うん。」

潮田はバックルームに入って制服を脱いだ。

七生と普通でいられる自分がいた。どこも痛まない。普通だった。掌を心臓に当ててみた。七生の顔を思い出してみても、鼓動は正常。

もう俺、本当に平気なんだな。

12歳から8年近く。

七生が想い出になった。

バックルームから店内に出て、潮田は店長に挨拶をした。そしてマガジンラックを覗いた。

そこに七生の姿はなかった。

「あれ・・・？」

店内を見回した。やっぱり七生の姿は何処にもなかった。

店を出て、辺りを見たが、後ろ姿さえも見当たらなかった。

「？」

潮田にとっては、それは小さな疑問だったが格別心に留める程の事では無かった。

その頃、七生は電車の中から流れる景色を見ていた。

麦わら帽子を目深に被って口を真一文字にし涙を堪えていた。

自分から手放した恋を、諦めきれない。

潮田の重いほどの愛情から逃げて逃げて、貶めるような事をしたのに、忘れる事も、想い出になっていく事もないこの気持ち。

救いようのない惨めさに潰れそう・・・。

七生はドアにもたれながら、そこへしゃがみ込んでしまった。持っていたハンカチで口を覆った。

抑えきれないほどの涙が溢れ出た。

STORY (21)

潮田は、部屋の片隅に段ボールを綺麗に積み上げていた。

22年間暮らしたこの部屋を、この春、出る事にした。内定を貰った会社で、3年程、本社のある関西に行かなければならない辞令が出たからだった。

クローゼットの中身をかき出していると、埃を被った真っ赤なりボンタイが出てきた。

潮田は埃を掃って、繁々とそれを見つめた。

走馬灯のように七生の事が蘇った。

「・・・七生のじゃねーんだよな。」

これをロッカーに置いたという陸上部のマネージャーから手紙が届いた事も思い出した。

七生のだと思い込んで、オナニーしてたことも思い出された。

「・・・きもっ。」

そう自分でいって、ごみ袋の中にタイを投げいれようと腕を上げた。

「・・・マネージャー・・・。」

名前も思い出せなければ、顔も勿論思い出せなかった。

潮田はそのタイを机の上に放り投げた。

流石にごみの中に入れるのは躊躇われた。

「杉？俺、潮田だけど。」

『おおー潮田ー、何してんだよ。去年の同窓会以来じゃんよ。』

潮田はその夜、どうしても気になって腐れ縁の杉に電話をかけた。

「お前のねえちゃんのさ、中学の時の卒業アルバムって未だあるかな？」

『ねえちゃんの？うーん、捨ててはないと思うけど、何で？』

「ちよっと調べたいことがあるんだわ、今から行っていない？」

『今から?!』

「いらっしゃい。」

杉の姉がラフな格好で出迎えた。

「突然、すみません。ありました?」

「埃被ってたけど、あったよ。どうぞ、リビングで。」

杉がソファで缶ビールを飲んでいた。

「お袋居ないから、何にもないけど、これビール。」

「わりい。」

潮田は出されたビールをそのままに、直ぐに用意されていた卒業アルバムを開いた。

目的は”部活動”のページだ。

サッカー部、野球部、バレー部、バスケット部・・・陸上部。

幼い頃の七生がいた。

その中に一人だけ、学校指定ジャージを上下で着用しているショートカットの女がいた。

潮田はそれを指差して、どちらにでもなく「これ誰?」と聞いた。答えたのは、杉の姉だった。

「林紗江でしょ? 林がどうかしたの?」

潮田は頭の中でその名前を反復した。そうだ、確かその名前だった。

「中学卒業して確かイギリスだったかな。行った子なんだよね。」

ああそうだ、そんな事が手紙に書かれていた気がする。

やはり、あのタイは林紗江からだったんだな。

「七生と仲良かったんじゃないかな。」

潮田は杉の姉を見た。

「・・・ねえちゃん、こいつの前で清野さんの名前はタブーだよ。」

杉がビールで顔を赤くしてそう言った。

「ああ二人、一時付き合ってたんだっけ?」

10年前の話だ。

「付き合っていないっスよ。」

潮田は苦笑いをした。

杉の姉も、笑って

「若いね、中学生って。」

と言った。

潮田の頭の中で、”七生と仲良かった”という話が引っ掛かっていた。

「陸上部のマネージャーって、何してたっけ？」

杉が、姉に聞く。

「それこそ”ユーレイ部員”でしょうよ。喘息か何か持ってた体育もあんまり、やってなかったよ、林。」

ユーレイ部員だった筈の人間が、少しの期間しか部活に出てなかった潮田を知る筈もない。

潮田の頭の中に一つの結論に達した。

あのリボンタイは、七生が俺のロッカーに入れた。

俺がF高に入学して、慌てて”林紗江”というダミーを作った。何の為。

「俺から逃げる為だろーなー・・・。」

潮田は杉の家からの帰り道、黄色い月を見上げながら帰宅の途に付いた。

机の上のタイは、ごみ袋に入れた。

STORY (22)

京都弁だったり、習慣だったり、人柄に慣れた京都での生活が1年ちよつとを経過したころ、潮田に旧友から電話があった。

”元氣か”の話し出しに、報告だと告げて、七生がデキ婚、近々、親しい友人だけ集めて結婚パーティーをすと言った。

”そうか”と言って電話を切った。

「・・・杉もおせっかいだな。」

潮田は携帯を折りたたんでスーツのポケットにしまい、パソコンの画面に目をして日報の続きを始めた。

キーを叩く手を止め、スケジュール帳で直近の予定をチェックした。

9

大通りを一本入った、洋館のようなリストランテで、七生の結婚パーティーは開かれた。

喧噪から逃れ、青々とした木々に囲まれたその会場は喜びに満ちていた。

潮田は新婦が座る上座に向かって、シャンパンとオレンジジュースを持って歩き出した。

自分に近づく人影に気づいて、七生が顔を向けると潮田の笑顔が在った。

「潮田！」

「おめでとう。杉のねえちゃんに頼んで一緒に来たんだ。一言お祝言い言いたくて。」

「・・・今、関西の方に居るんじゃないかった？」

七生は潮田からグラスを受け取って、横に座るように促した。

新郎は、学生時代の友達と談笑し、その近くに七生の友達と思しき女性陣が数名居た。

「うん。京都。・・・はじめをつけようと思ってね。」

潮田は七生を優しい目で見つめた。

二人はテラスに出て、外の開放的な空気を吸った。

七生は手摺りに背をつけ、潮田はそこに両腕を置き、二人は互い違いの格好になった。

「俺・・・どれくらいの間か解んないけど七生の事、好きだったよ。」

「・・・あたしも潮田の事、好きだった。」

潮田は小さく笑った。

「中学、高校って凄くガキで苦しかった。だから・・・七生に会わなければ良かったと思った事もあった。」

七生も潮田に倣い、グラスを手摺りに乗せるような形で向き直った。

「あたしも、貴方に出会わなければ良かったって思った。」

二人の恋は、優しく育まれることも激しくぶつかり合うこともなかった。

ただ想いだけが大きくなって、なり過ぎて、行き場を見失って、彷徨い続けていたのかもしれない。

「好きになった事も、会わなきゃ良かったって思った事も全部ひっくりめて本当で、後悔もない。二人が付き合うことがなかったのも、運命だったんだと思う。」

そう言って、オレンジジュースで喉を潤す七生。潮田もシャンパンを一気に飲み干した。

潮田は七生の顔を見た。

お互いの視線がぶつかる。

七生が微笑んだ。

出会って11年。

心が触れ合った一瞬だった。

エピローグ

「あ、もしもし？俺。今から実家に顔出して、明日の午後の新幹線でそっち帰るから。」

潮田からの連絡を待ち侘びていたような電話の向こうの明るい声が届く。

「え？ひよこ？あれは東京の銘菓じゃねーよ、福岡だって。本当だよ。」

潮田は笑った。

携帯の通話終了ボタンを押すと、待ち受け画面に電話の相手が可愛い顔で笑ってた。

貴方に出会わなければ良かった

と思うよりも、貴方に出会えて良かったと言える恋を。

*** THE END ***

エピローグ（後書き）

最後迄、読んで頂き有難うございました。

何か心に残るフレーズがあったとしたら、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0956i/>

STORY

2010年10月9日23時15分発行